ひびわれ団地4号館

川北亮司 作　太田大八 絵

NDC 913　　8093－01552－7159
174ページ　21cm

ひびわれ団地4号館

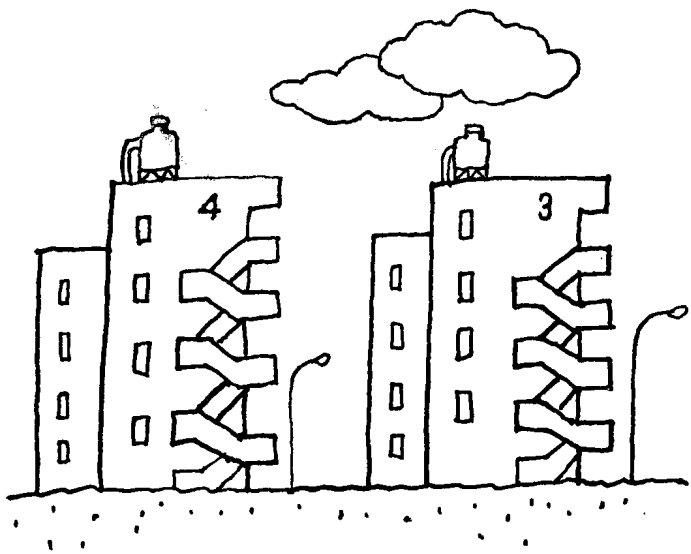
昭和52年6月23日　第1刷

著者　川北亮司
発行者　大邊 豊
発行所　PHP研究所
〒601　京都市南区西九条北ノ内町11
電話　075(681)4431〈代表〉
印刷所　東洋印刷株式会社
©1977　Ryoji Kawakita. Printed in Japan

乱丁・落丁本はご面倒ですが弊所出版部宛お送り下さい。送料弊所負担にてお取り替え致します。
(定価はカバーに表示してあります)

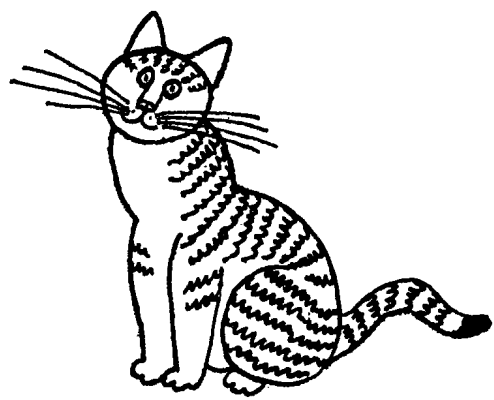
ひびわれ団地4号館

川北亮司 作　太田大八 絵

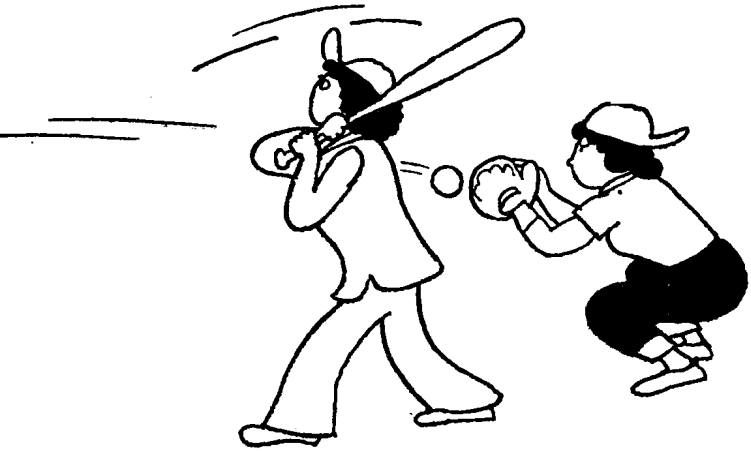


装幀デザイン　上田晃郷

もくじ



此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com



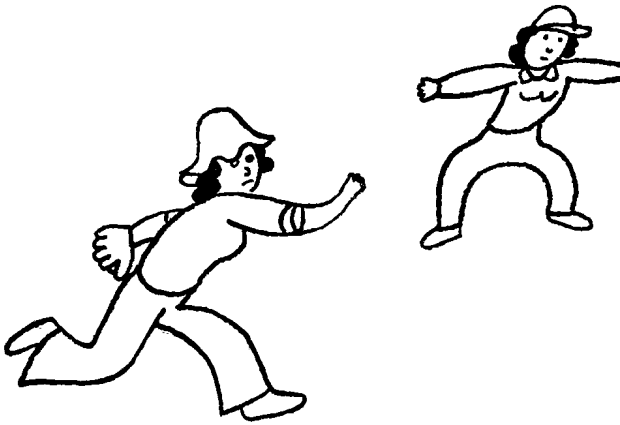
1 フントウ努力いたしますの章 8

2 よれよれくたくたフラワーズの章 25

3 心のきずと顔のアザの章 41

4 電話のむこうの大じけんの章 55

5 くやしい別れと悲しい別れの章 68



6 げきはできてもソフトはできない?の章 87

7 いやな日をすばらしい日にするの章 114

8 こんじょうで学芸会は大成功の章 137

9 なにごとも勉強の章 153

日本財団支援

笹川良一記念文庫

財団法人日本科学協会

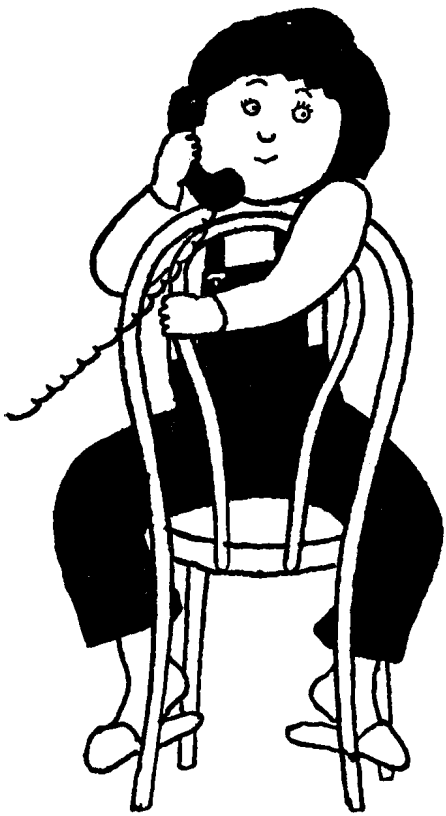
著者・川北亮司(かわきた・りょうじ)

1947年、東京生まれ。早稲田大学文学部入学。早大少年文学会に入会。在学中に出版した「はらがへったらじゃんけんぽん」で日本児童文学者協会新人賞受賞。他に「街かどの風」「五つめのおくりもの」などがある。現住所　〒270 松戸市常盤平3－25常盤平団地3－22－405

画家・太田大八(おおた・だいはち)

1918年、長崎県出身。多摩美術大学卒業。作品に、「せかいにパーレただひとり」「二年間の休暇」「馬ぬすびと」など多数。現住所　〒176 東京都練馬区練馬2－22－12

ひびわれ団地4号館



1　フントウ努力いたしますの章

「うああっ。」

デコはふとんの中で、思い切ってのびをした。力いっぱいひろげた鼻のあなから、おいしい朝の空気がはいってくる。ねちっこい口の中のつばをのみこむと、デコはいそいでもう一度、あじわうようにいきをすいこんだ。デコの大好(だいす)きなたまごやきのにおいがしたからだった。

「うーん、すてきな日曜日だわぁ。」

そんなひとりごとをいって、デコは猫(ねこ)がやるように、ねむい目を何度もこす

った。

「ねぼすけ、早く起きろよ！」

台所からパパの声がした。

「うー。」

デコは起きるとも起きないとも、どっちにもとれる返事をした。日曜日のふとんほど気持ちのよいものをデコはほかに知らなかった。このまま起きてしまうのは、あまりにももったいない。デコはまたごそごそとふとんの中にもぐりこんでしまったのだ。

「なにやってんだ。パパの方は、もうすっかり準備(じゅんび)できてるんだぞ。」

「……準備？」

デコはぼんやりしている脳(のう)みそを働かせてみたけれど、思いあたるものがなかった。

「なんの準備？」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

「カーテンをあけてみなさい。まったくデコは亡れんぼなんだから……。」
デコははっとして飛び起きた。てんとう虫のもようがいっぱいの厚いカーテンを引くと、まぶしい太陽の光が、外にはいっぱいだった。団地の四階の窓からは、きのうの夜ふっていた雨が、下の方に小さく見える家々の屋根できらきらひかっていた。
「こりゃこりゃ大変、あら大変！」
学校に出かける時と同じに、デコはたった三十五秒で着がえをすっかりすませると、ふすまを足のおやゆびにひっかけて力いっぱい引きあけた。
「おあよう！」
「なにが、おあようだ。ママはもうとっくに出かけちゃったぞ。」
「だって、きのうねる時は、ざんざんぶりだったんだもの。ぜったい、きょうの試合は中止になると思ってたんだ。」
「まあいいから、早く朝ごはんを食べちゃいなさい。」

デコはいつものとおり、五十八秒で歯をみがいて、顔をあらって、かみの毛をとかしおえた。

じつはきょう、ここの団地のママたちが、ひと月ほど前に作ったソフトボールのチーム、フラワーズクラブのはじめての試合がおこなわれることになっていた。

「デコの一番好きなたまごやきを作ってやったぞ。あわてて舌でもかまれるとこまるから、ゆっくり食べろよ。」

エプロンのすそでぬれた手をふきながら、パパが台所から出てきた。パパはなんだかニヤニヤうれしそうな顔をしている。デコはこんなパパを今までに一度も見たことがなかったから、いやな予感がしてしまった。小さなお皿にのっているくずれかかったたまごやきを、パパに見つからないように、そっと指でつまんで持ち上げてみた。

やっぱりだ！　たまごやきのうらは、みるもむざんにまっ黒にこげていた。

ママがいないと、パパはなんにもできないのだ。
デコはあきれてためいきをついた。だけど、
「味つけしてあるから、おしょうゆかけなくてもいいぞ。パパが愛情こめて作ったんだから、おいしいぞ。」
パパはちっともわかっちゃいない。でも、はじめてたまごやきを作ったパパの気分をこわしちゃいけないと思って、デコはなんでもない顔で、すみみたいなたまごやきをぱくっと口にほうりこんだ。
「どうだ、おいしいか？」
パパはテーブルの上にぐっとからだをのり出してきた。
「う、ん、とってもおいしいよ。」
デコはそういいながら、口の中でジャリジャリするすみみたいな、こげやきたまごをのみこんだ。
「そうか、そいつはよかった。この次の日曜日には、またたまごやきを作って

やるからな。」

パパはタバコのヤニで黄色くなった歯をみせてニヤッとわらうと、満足そうにひとりでうなずいていた。

デコはすっかり食よくがなくなった。せっかくのすてきな日曜日の朝がだいなしになってしまった。

ママがつつんでおいてくれたサンドイッチを持って、デコとパパがグランドについた時は、もう試合がはじまっていた。グランドといっても、団地のそばを流れている安田川の川原の雑草をてきとうにぬいて、ママたちが作った広場だ。

デコは土手をかけおりながら、

「なによ！　ママたち、こてんぱんじゃないの！」

ひめいにちかい大声を出した。それもむりのないことだった。点数表の黒板

には、「5」という字がくっきり書かれている。フラワーズクラブは、たった一回で5点もとられていたのだ。それもまだ相手チームが攻撃中というおそまつさだった。

デコとパパは、持ってきた大きなビニールをいそいで広げると、さっそくフラワーズクラブのおうえんだんにくわわった。

ピーッピッ　ピッピッピッ

「あとひとり、あとひとり、しまっていこうぜえーっ！」

「がんばれーっ。」

「くじけるなァ、まだ一回だぞーっ！」

ふえとかん声がもり上がった。かっこうよくはちまきなんかして、ふえをくわえてがんばっていたのはヨッチンとマサオだった。ヨッチンはデコを見つけると、うれしそうに手をふってよこした。

「おい、デコーッ、手伝ってくれよ。」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com